

## 【漢方医学の四診（望、聞、問、切） 聞診】

聞診は、患者さんの声を聞き、臭気を嗅ぐことから病態を理解します。音声には言語、呼吸、咳嗽（せきのこと）などがあり、感情の起伏と関係があります。楽しい時、悲しい時、それぞれの心のありかたによって変化しますが、一時的な怒りによる「急」声、うれしい時の「和」声などは病態と直接には関係しないと考えています。言葉を話したがない、小さくて話がとだえる、前後の続きがはっきりしなくて、一つのことを二度も三度もくりかえす。こういった方は虚証と考えます。これに対して言葉がはっきりとよく通り、積極的にお話される方は実証でしょう。

臭気の判断は、環境的な要因に分けて考えます。口臭も、消化不良によるものか、あるいはむし歯、ちくのう症、呼吸器疾患によるものかを考えます。たとえば消化器疾患ではすっぱいにおい、歯科疾患ではちょっと腐ったようなにおい、そして呼吸器疾患では生ぐさいにおいになります。咳は同時にゼロゼロと喘鳴（ぜんめい）を伴うか、乾いた咳か、たんを伴う咳か、きれ易いたんかきれにくいたんか、夜間に多いか、起床時に多いかなど「問診」と関連することが多いのですが、こうした内容を聞くことによって具体的な薬方を考えることができます。

一般に喘鳴を伴う咳嗽には麻黄（まおう）、杏仁（きょうにん）、五味子（ごみし）の配合された薬方、麻黄湯（まおうとう）、小青龍湯（しょうせいりゅうとう）、麻杏甘石湯（まきょうかんせきとう）などをお出しします。

また乾いた咳が続く場合には、滋潤剤（潤すお薬）である地黄（じおう）、麦門冬（ばくもんどう）、人参などの配合された薬方、麦門冬湯（ばくもんどうとう）や参蘇飲（じんそいん）などですね。こうした薬方はたんが切れにくい場合にもよいわけです。

但したんの量が多い患者さんに出しますと、かえって咳嗽は止まりません。また、胸痛を伴うときには柴陷湯（さいかんとう）を考えます。